



# ハーレム ロイヤルガード

HAREM ROYAL GUARD

小説 竹内けん  
挿絵 のりたま

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



## 登場人物紹介

Characters



### エステリーゼ

シェルファニール王国の幼王の姉。  
明るく活発で、小悪魔的な性格。弟  
の側近であるパウロのことは昔から  
知っており、好意を寄せている。



### マリアルイズ

シェルファニール王国の後妃で、  
幼王とエステリーゼの母親。夫  
である国王が亡くなった後、国  
を支えていた事実上の女王。

## ブルーセイス

侯爵家の後継者候補の一人。侯爵家を継ぐためには、パウロの愛人になってもいい、という条件を出してくる。絢爛たる美女。



## ゼセラ

もう一人の侯爵家後継者候補。王立学校で教師をしている真面目な女性。遺産を相続したら、貧しい子供たちのための学校を作りたいと思っている。

## パウロ

幼くしてシェルファニール王国の王となったマティアスの宰相を務める青年。女の扱いには慣れていない。

第一章	二十歳の宰相
第二章	后妃の子飼
第三章	社交界の華
第四章	象牙の塔
第五章	王姉殿下のご趣味
第六章	王国の守護神

「味は？ パウロのおちんちんって美味しいのですの？」

「はい、とても美味しゅうございます」

実際、ブリューセイスは実に美味しそうに逸物を舐めしゃぶっている。

その光景を見下ろしていて、エステリーゼは喉をごくりと鳴らした。そして、恐る恐るパウロにお伺いを立ててきた。

「あの……わたくしも舐めていいかしら？」

「い、いえ、それはダメです。絶対ダメです」

顔面蒼白になったパウロは、断固として拒否した。

「どうしてですか？ 不公平ですわ」

頬を膨らませるエステリーゼを、ブリューセイスが窺める。

「いけませんわ。王姉殿下。殿方のお大事にご奉仕するのは、あたくしたち下々の女の仕事。王姉殿下はもっとどつしりと構えていなくては」

「……パウロ様？」

瞳を潤ませたエステリーゼは甘えるような表情で見上げてきた。今にも接吻しそうな距離にどぎまぎしながらも、パウロは耐える。

「はい。姫様がなさることではありません」

「う……、パウロ様のいけず……」

「いけずと言われましても……」

拗ねた顔をするエステリーゼを前に、パウロは心の底から対応に困った。その一方で、ブリュースイスは熱心に肉棒を啜り続ける。

（ブリュースイスの奴、この状況を楽しんでますね。この性悪女め）

このなんとも不可解な状況を打破する方法を、パウロが思案していたときである。

「あ……」

ふいに驚いた表情を浮かべたエステリーゼは両足を閉じると、スカートの上から股間のあたりを両手で押さえた。

真っ赤になっておろおろしているエステリーゼの反応は、あまりにもわかりやすい。女の生態を少しでも知ってしまった者の目から見ると丸わかりだ。

（エステリーゼ様、濡れてきちゃっているんだ……。エステリーゼ様の喘ぎ声ってどんなものだろう……ヤバイ）

母親たるマリアルイズの喘ぎ顔を知っているだけに、その面影のある娘の喘ぎ顔は生々しく想像できてしまった。

これ以上は限界だと思ったパウロは、ブリュースイスに中止を命令する。

「悪い、ブリュースイス。少々、飲み過ぎたらしい。トイレに行く」

「ダメですわ。おしっこをしたいのなら、このままなさってください」

「えっ!？」

逃げだそうとするパウロに、逸物を啜えたままブリュースイスは野心的に微笑む。

「あたくしが閣下の肉便器であることを証明してご覧に入れますわ」

「おしっこを飲むっ!？」

エステリーゼは目を剥いて硬直している。

(ここでおしっこをしろと言われても、出るわけがない)

トイレに行きたくなったというのは、嘘ではない。しかし、美女の口にするというのは、さすがに凄まじい精神的な抵抗がある。まして、傍らでは純真無垢な美少女が、好奇心丸出しで見守っているのだ。

(あ、でも……急に、凄く出したくなってきた)

なんとも妖しい誘惑に、パウロは耐えかねた。

「それじゃ、するよ」

パウロは美女に咥えられている排泄器官の、蛇口を緩めた。

チヨロ、チヨロチヨロチヨロ……。

絶世の美女の口内に、男の小水が流れ込んでいく。

ゴクリゴクリゴクリ……。

と細い喉が上下するが、とても飲みきれず、口内から溢れて、胸元を濡らした。

「ああ、美味しい……♪」

小水である。美味しいはずがない。しかし、少しも嫌悪の表情を見せずに、小水塗れの美女は恍惚と溜息をついてみせる。大した役者ぶりだ。

「閣下、あたくしの覚悟のほどを見ていただけたでしょうか？」

「ああ……見せてもらった」

興奮に脳裏が焼き切れたのを感じた。

すつくと立ち上がったパウロは、もはや、その場に王姉エステリーゼがいることすら忘れた。

ブリューセイスをその場に押し倒すと、その両足首を持って左右に開く。

手入れの行き届いた陰毛の奥に、赤い濡れた華が見える。

「まったく、イヤらしい女だ。エステリーゼ様の御前だというのに、こんなにグチヨグチヨに濡らしてっ！」

「ええ、イヤらしい女には罰が必要ですわ。どうか、宰相閣下に罰して頂きとうございます」

二人のやり取りに、エステリーゼは呟く。

「なんか、パウロ様怖いですわ」

しかし、そんな部外者の言葉など、牡と牝になってしまったパウロとブリューセイスの耳には入らない。

「そうだな、罰を与えてやろう」

いきり立つ逸物を振りかざしたパウロは、その切っ先を痴女の肉穴に添える。そして、そのままズボズボズボと押し入れた。



「ああああ……♪」

歓喜の悲鳴を上げたブリューセイスは、細い両腕を伸ばすとパウロの肩を抱き締めた。ぐちゅつと濡れた牝肉が肉棒を包み込んだ。

（おお、奥までぐちゅより濡れているだけでなく、ざらざらして、よく締まる）

これが若さというのだろうか。新鮮で今が旬の女肉を食らったという気がした。

「ああ、いい。凄くいい。硬くてゴツゴツしておられる。さすがに一流の男は、おちんちんも一流ですね」

ブリューセイスの感嘆の声を聞きながら、パウロは腰を動かす。

グッチョ、グッチョ、グッチョ……。

一突きごとに愛液が溢れ、一抜きごとに愛液が掻きだされる。

「ああ、いい、気持ちいい、気持ちいいですわ♪ ああ、いい。気持ちいい、そこ、そこ気持ちいいいいいい♪」

気持ちいい、気持ちいいと連呼するのは、男に慣れた女ならではの演技なのかもしれない、と理性では考えるのだが、やはり、女に気持ちいいと騒がれると、男としてはついっに乗せられてしまう。

（それにこんな熱くてドロドロのマグマみたいなオマ○コの中にいたらたまらんっ！）

獣欲のままに腰を使い、女穴を掘りまくっていたら、射精欲求が、もの凄い勢いで高まってきた。しかし、すぐに出してはダメだ。

早漏では女を堕とすことは叶わないだろう。マリアルイズにいつも我慢するように叱責されてきた。

（す、少し休もう……）

パウロは、ブリュースイスの腰を抱くと、そのまま立ち上がった。そして、ソファーに座り直す。

「あん、閣下……♪」

惚けた表情のブリュースイスは、夢中になってパウロへと口づけをしてきた。その唇は先ほど自分のお小水を飲んだわけだが、そんなことは気にならない。

頭の中がそういうことに嫌悪する余裕をなくしている。

「っ」

ただただ獣欲の赴くままに唇を交わし、腰を使う。パウロだけではなく、ブリュースイスまで激しく腰を使う。

「ああ、凄い、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいいいい♪」

「ぼ、ぼくも気持ちいい……」

気位の高いマリアルイズは、セックスの最中に喘ぎ声を漏らすことはあっても、ここまであからさまに快感を叫んだりはいしない。

（凄い、彼女とのセックスがこんなに楽しいだなんて思わなかった）  
痴女とやる遊びというもののだろうか。



近くでエステリーゼが見ていることなど忘れてしまう。ただただ獣欲の赴くままに振る舞うことに歓びを感じた。

「ああ、あたくしが上になりますわ。ご奉仕させてください」

パウロをソファァーに押し倒したブリューセイスは、立ち膝について豪快に腰を使い始めた。

「ああ、ゴリゴリ、ゴリゴリして、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいいいい♪」

歓喜の悲鳴を上げる牝は、天を仰ぎ、涎を噴き、振り乱す両の乳房を自ら揉みながら、貪るようにして腰を前後に使う。

マリアルイズも自分から腰を使うことはあったが、ここまで激しい腰使いはなかった。

（おお、さらさらのおま○この中でちんぽが振り回される。こういうのを痴女の鬼腰って言うのか？）

娼婦も真つ青なのではないか、と思える激しい腰使いだ。

普段、彼女がどういう性生活を送っていたかは知らないが、おそらくここまで積極的に腰を使っではないであろう。

権力者に取り入ろうと、彼女なりに必死なのだ。

（淫らだが、美しい）

まさにエロカッコイイ女だ。

彼女とのセックスは、純粹な娯楽として楽しいと思った。

「ああ、イク、イク、イク、イク……あたくし、もう、いつてしまえますっ！」

「ぼくも、イク……」

「ならば、ならば一緒に、一緒にお願ひ致します、あああ」

女の切羽詰まった声に乗せられて、パウロもまた限界に達した。

「でるっ」

ドビュッ！

「あつ、来ましたわ。ああ、来ました。ああ、気持ちいいいい！ イツくうううううう!!!」

どびゅびゅびゅびゅ……!!!

痴女の体内を、熱い血潮が一気に駆け上がる。

「あああああ」

弓なりに反りかえった美しい女体は、ぶるぶると痙攣していたが、逸物の力が弱まるに従つて、ぐつたりと脱力。男の胸へと沈んできた。

「はあ、はあ、はあ……凄いい、最高でした。閣下♪」

「はあ、はあ、はあ……喜んでもらえて嬉しいよ」

二人はどちらからともなく、唇を重ねる。

そこに完全に気を吞まれた表情の、エステリーゼのか細い声がかかった。

「い、今のがセックスですね……」

ソファで大股開きになり、自らの陰部を弄んでいたゼセラは肢体を激しく痙攣させたと思うと、ぐったりと脱力した。

それを恐怖したように見入っていたエステリーゼが恐る恐る口を開く。

「イきましたの？」

「ええ、いったみいですね」

パウロは努めて平静に答える。

「へえ、オナニーでいくとはこういう状態ですね。わたくしまだいった経験がないから、よくわかりませんが、なんだか気持ちよさそう……」

面白いものが見られたとエステリーゼの声は熱く弾み、それでいて妙に悔しそうであった。

※

「あなた、パウロの愛人となったら、どのような奉仕をするつもりでいるの？」

ゼセラが落ち着き、理性が戻ってきたところを見計らって、エステリーゼは再び尋問を開始する。

「そ、それは……いろいろと。パイズリなどして差し上げるつもりでした……」

「パイズリ？ それはなんですか」

本気でわかっていないエステリーゼの前に、退廃的な笑みを浮かべたゼセラは自らの乳房を服の上から軽く押さえて、自慢げに応じる。

「わたしの乳房の間に、パウロ様のお大事を挟むのですわ」

「おっぱいとはそのようなことに使うものでしたのっ!」

愕然とした声を上げたエステリーゼは、自らの乳房とゼセラの乳房を見比べる。

成人女性の中でも特大の巨乳枠に入るゼセラと、まだまだ発展途上の小娘エステリーゼでは、服の上からでも勝敗は一目瞭然だ。

エステリーゼの母親は、瘦身のわりには巨乳の持ち主だし、将来性は十分だと思うが、やはり現時点での負けは免れない。

「……」

敗北感に立ちつくしているエステリーゼを前に、勝者の余裕といった笑みを浮かべたゼセラは、パウロにお伺いを立てる。

「今、パイズリさせて頂いてよろしいでしょうか？」

「え、え……と……それじゃ、頼む」

「了解しました」

身を起こしたゼセラは白いブラウスの胸元をはだけさせる。

乳房をすっぽりと包む洒落度の低い実用的な水色のブラジャーを取ると、ボヨンと白い肉感があらわとなった。

（いつ見ても大きいですね）

マリアルイズやブリューセイスも十分に巨乳だと思ったが、ゼセラの巨乳ぶりは彼女た

ちより一段格上だ。

根元から太い。下膨れの乳房。

綺麗な球形のブリューセイスや、釣鐘型のマリアルイズに比べると、少し不格好に見えるが、なんともイヤらしい形だ。これをエロ乳と言うのではなからうか。

その圧倒的な巨乳を前に、エステリーゼはよろける。

「……っ！」

同じ女として畏怖したようだ。

小娘、と言いたげに、「ふふん♪」と鼻で笑ったゼセラは、テーブルを脇にどかすと、パウロの膝の前に跪いた。

「では、パウロ様のお大事を頂けないでしょうか？」

「あ、ああ……」

許可をもらったゼセラは、パウロの両膝を開かせると、ズボンの中から逸物を取り出した。

臍近くにまで反りかえった逸物を前に、ゼセラは溜息をつく。

「ああ、これがパウロ様のお大事……素敵♪」

ぽっと頬を染めたゼセラは、熱い吐息を吐きながら、自らの両の乳房を両手で抱え上げると、その頂きを飾る赤い乳首をチュッチュツと吸い上げて尖らせた。

（自分で舐められるんですかっ!）



その手慣れた様子からして、間違いなくオナニーするとき、自分でやっていたのだろう。  
(才媛なのに、なんとというエロい女なんでしょう)

生唾を飲むパウロを見上げたゼセラは、にっこりと微笑む。

「では、パイズリをさせて頂きます」

男の太腿の狭間に上体を入れたゼセラは自慢の乳房を両手で持ち上げると、いきり立つ肉棒を、巨大な肉塊の狭間に包み込んだ。

(っ!! こ、これは、なかなか……悪くない)

まさに巨乳女ならではの必殺技といったところだ。

その気持ちよさにパウロは目を剥いた。

むっちりヤワヤワとした乳房は、まるで綿菓子でできているかのように柔らかく温かい。  
(かぶりついたら、綿菓子のように甘く、そして蕩けるのではありませんか?)

そんな錯覚を抱かせずにはおかないう乳房に、モミモミと揉み込まれる。

「はあ、はあ、はあ、熱い……これがパウロ様のお大事なのですね」

感嘆の声を上げるゼセラは、乳房を激しく上下させる。

巨大な乳房を上下させるのは重労働らしく、額や胸元から珠のような汗が噴き出している。  
る。

そうやって一生懸命に奉仕されているというのは、見ているだけでも気持ちがいい。  
逸物の先端からは先走りの液がだらだらと噴き出してしまふ。

「ああ、喜んでいただけで幸福ですわ。この乳房はパウロ様にお望みの際には、このゼセラいつでも参上して、このように包んで差し上げます」

陶酔の表情を浮かべたゼセラは、舌を伸ばすと、尿道口をペロペロと舐める。

「ああ子種が、パウロ様の子種が溢れています。ああん♪ パウロ様のお大事に乳首が擦れて気持ちいい」

勃起した乳首を、器用に肉棒の鰓に擦りつけてくる手際のよさなど、とても処女とは思えない。

（もし、本当にまったく経験がないのだとしたら、自分一人でよっぽど予行練習していたんでしょね）

オナニー癖があると告白してしまった彼女だ。オナニーの気分を盛り上げるための前戯として、一人黙々とパイズリの練習をしていたのだろうか。その光景を想像するとたまらなくなる。

肉棒がかつかと熱くなってきた。

「ゼセラ、そろそろいくよ」

「ああ、お情けを、お情けを頂けるのですね。お願いします。このまま、わたしの顔におかけください♪」

頬を染め、自己陶酔の極みに達している痴女の顔に向かって、パウロは欲望を放った。



「うっ」

小さなうめき声とともに、白い乳肉に包まれた赤黒い肉棒の先端が開く。

ドビュ、ドビュ、ドビュユユユ!!!

眼鏡をかけた才女の顔がみるみるうちに白濁に塗れていく。

「ああ……凄い臭い。これがパウロ様の精液なのですね。ああ……パウロ様のお情けを賜れて、嬉しゅうございます♪」

陶酔の吐息をついたゼセラは、肉感的な唇に付着した精液をペロリと舐めただけでは飽き足らず、顔に付着したものを指で掬って口に運び、さらには肉棒をチュウチュウと啜り、最後の一滴まで絞り取った。

おかげで逸物は萎えることも許されない。

「まったく、キミに負けたよ」

ゼセラの頬を撫でてやったパウロは、ゼセラを立ち上がらせると、自らも立ち上がった。そして、ゼセラを窓枠に向かって立たせるや、背後からスカートをたくし上げる。

「パウロ様、何をするおつもりですか？」

今まで茫然と見学していたエステリーゼが我に返って声をかける。

「ここまでしてくださった女性に、なんのお返しもしないわけにはいかないでしょう」

パウロは白い充実した臀部を掴むと、左右にがばっと開いた。そして、猛り狂う逸物を、蜜壺に添えた。

「入れますよ。いいですね」

「は、はい……よろしくお願い致します」

窓枠に両手を突き、尻だけを突き出した形のゼセラは、耳元で囁かれてコクリと頷いた。約三十年間近く大事に守られてきた才女の処女の陰唇は、お漏らししたかのように大量の愛液を垂れ流している。

その光景にエステリーゼは半狂乱になって叫ぶ。

「ちょ、ちよっと、パウロ様、そんなダサくて変態な女にまでお情けをあげますの!？」

「ぼくは淫乱な女性が好きなんですよ」

ここまできて王女のワガママに付き合っている余裕はない。牡欲に従い逸物を叩き込んだ。

「あっ！」

大きく口を開いたゼセラは、思いの外に可愛らしい悲鳴を上げる。

ブツッ！

生肉をひきさくようにして、肉棒は押し込まれていく。

「あああ……」

ゼセラは窓枠にしがみつки、自らの巨乳を窓ガラスに押しつける。

いわゆる処女のずり上がりであろう。

いかに夢見た男の逸物を入れられているとはいえ、痛いものは痛い。

破瓜の痛みから逃れようと、上体を起こし、乳房を窓ガラスに押しつける。しかし、逃げようもないので、肉棒は押し込まれていった。

「は、入ったよ。これでキミも処女を卒業だ」

「う、嬉しい。パウロ様に捧げられて、わたしは幸せです」

痛みからだろう。目尻からは涙が溢れ、白い太腿の内側を赤い滴が垂れた。

その身体を、パウロは両手で抱き締める。

（おお、脂が乗っていい感じだ。こういうのを抱き心地のいい身体って言うのだろうか）  
処女だったとはいえ、成熟した大人の女である。男を迎え入れる器としては完成している。

膣洞もヤワヤワと締めつけてきて、実に心地いい。

たまらなくなったパウロは、肉棒と肉穴を馴らすべく、腰を「の」の字に動かした。  
ヌチャヌチャヌチャ……。

「あああ……気持ちいいい、身体がパウロ様のものへと馴染んでいきますよ」

大口を開けたゼセラの口元から、涎が垂れている様が、窓ガラスに映っている。  
（まったく、国を代表する碩学がなんて浅ましい顔をしているんだか）

自然、パウロの腰使いは荒々しいものへと変化していく。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

男の腰と女の桃尻が激しく打ちあわされる。

「ああ！ ああ！ ああん！ すごいつ！ すごいですわっ！」

涎を垂らし歓喜するゼセラの、巨大な乳房が、窓ガラスに押しつけられて形を変化させる。

（まったく、窓の外から覗いている生徒がいたらどうするつもりなんでしょうね）

という心配をしてやらないでもないが、もはやゼセラは完全に淫獣に堕ちていて、そういう世俗のことを思い煩う余裕はなさそうだ。

（まあ、彼女はもうぼくの女になったわけですし、誰にもとやかく言わせるつもりはありませんけどね）

初めて体験した処女の犯し心地を心行くまで堪能したパウロは、やがて限界を訴える。

「そろそろ、いくよ」

「ああ、お情けを、お情けを頂けるんですね」

牝としての予感にゼセラは震える。

パウロの腰使いはさらに荒々しいものとなった。

「ひい……ください。お種を、お種をくださいいいいい」

「くっ……」

牝の懇願に釣られる形で、パウロは精を放った。

ドビュドビュドビュユユ！！

射精しながらも腰を使い続けて、膣内いっぱいにくたくたやってやった。

「もうあたくしは正式にパウロ様の愛人となったのです。これから浮気するときには隠れたりせず、堂々とおっしゃってください。このようにあたくしも、息抜きのお手伝いを致しますわ」

ゼセラもブリューセイスも実に健気である。

そこにマリアルイズの呆れた声が聞こえてきた。

「まったく、これがつい最近まで女を知らなかった男とは信じられませんか。わたくしは、あなたは昔から、こういう性生活を送っているのだとばかり思っていましたわ」

「そんな皮肉を言わないでくださいよ」

パウロが困惑していると、後背位でエステリーゼが答えた。

「パウロ様ほどの素敵な殿方が、一人の女性に独占されたら、他の女たちの嫉妬によって、その女は死んでしまいますわ」

「ええ……、あたくしたちにとって、これが分相応ですわ」

ブリューセイスの応えに、マリアルイズが喜ぶ。

「うふふ、あなたたちとは仲よくやっていけそうね。それじゃお近づきの印に、あなたたちのクリちゃんも弄ってあげるわ」

四つん這いの三匹の牝犬たちの中、たった一人仰向けになっていたマリアルイズは、目の前で、男を啜え込んでいる実娘の淫核を舐めながら、左右の美女たちの淫核を抓んでみせた。



「ひいああああ!!!」

三匹の牝犬は、同時に狼の遠吠えのように背筋を弓なりにして牝叫びを上げた。

（うお、締まるっ!）

エステリーゼの膣穴に入っていた逸物が、ギュッと締められただけでなく、左右の膣穴に入った二指も、キュンキュンと締められた。

女たちが絶頂しようとしていることは明らかだ。

その予兆を察したパウロの腰使い指使いは、一気に激しいものとなった。

「あ、凄い! 気持ちいい! 気持ちいい! 気持ちいい!」

若く健康で感度抜群のエステリーゼは、大きな声で快感を訴え、それに他の女たちも乗せられる。

ブリュースェイスも、ゼセラも、もはや自分の快感に夢中で、他人に構っているどころではない。

「ああ、いい、これ凄くいいです!」

「イク、イク、イク、もういつちゃう、イク、イク、イク、イクウウウウウウツツ!!!」

三匹の娘たちの切羽詰まった喘ぎ声を聞いて、パウロのほうも否応なく盛り上がった。

グチョグチョグチョ

「ひいひいひい!!!」

激しい抽送運動に、女たちの蜜壺からは飛沫が舞った。

「ぼくイキますっ！」

雄叫びと同時に、パウロは欲望を解放した。

ドビュ！ ドビュ！ ドビュビュビュ—— ツツツ!!!

「ああ、きた！ きた！ きたっ！ 温かいのいっぱい入ってきたっ！」

エステリーゼの精液を注がれている声を聞いて、左右の指マンされている女たちもまた、自らに射精されているかのように、肢体を痙攣させた。

三人の美女美少女が、並んで絶頂している様はなかなか淫靡で見たえがある。

「ふう」

パウロが満足して逸物を引き抜いたときである。

「あ、ダメ、出ちゃう」

「あたくしも……」

「あああああ!!!」

三人の娘の尻がピクピクピクと痙攣したと思ったら、ブシャツと水風船が爆発したように飛沫が舞った。

いわゆる潮噴きであろう。

さらに三つの桃尻の谷間から、ブシャ、ジョジョジョー……と熱い液体が撒き散らされた。

その三本の滝の下には、仰向けになっているマリアルイズの顔がある。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

**悪の秘密結社vs正義のヒーロー**  
イケない戦いの記録!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説…高岡智空／挿絵…鈴眼依縁】



全国書店で  
好評  
発売中

**「…藤田君は責任取るべき」**  
睦月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3

【小説…さかき傘／挿絵…天海雪江】



宇宙海賊学園ブラックキャット

【小説…Kypnosus／挿絵…じまちゃん】

全国書店で  
好評  
発売中

**生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!**  
海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙聖字艶戦姫／ブナガツ ①～③
- 呪田喰らい師【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエール

- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がDMCに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて語る患者の夜

- ビルグリムメイデン ①～②
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 殉魔!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 3Dコブビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ!

あとみっく文庫

検索

http://ktcom.jp/index2.htm

KTC - KILL TIME COMMUNICATION...

おかげ様で46期!

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はここからどうぞ!

ほしいものちょっとつかも...

会社概要 通販ご利用方法 広告掲載案内 お問い合わせ プライバシーポリシー

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

コミックアンリアル  
コミックアンリアル  
アンリアル  
検索

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。お問い合わせください。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

最新情報満載!  
最新情報満載!!  
ゲーム化!  
ゲーム化!!

**Valkyrie**

http://www.comic-alkyrie.com/

**cranberry**

http://www.cran-berry.com/

**mille-feuille**  
ミルフィーユ

http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元  
ドリーム**

http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!